

●平成18年度／資源保全施策に関する地域リーダーのための人材育成研修（全国）

農工研
テキスト
01

資源保全施策に係る 合意形成に向けて

独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構

農村工学研究所 ● チーム「田援」

1. 住民参加型環境づくりの背景と形態

- 分権型地域社会構築へのうねり
- 計画の正当性の担保から計画の実効性の増進
- 地域ニーズの多様化
- 中間的領域の拡大 → 「共」的領域の確立
- 地域住民の生き甲斐活動への意識の高まり
- 地域住民の自己決定権の拡大
- 告発型市民運動から、提案型市民運動への展開

(1) 住民参加型環境づくり展開への背景

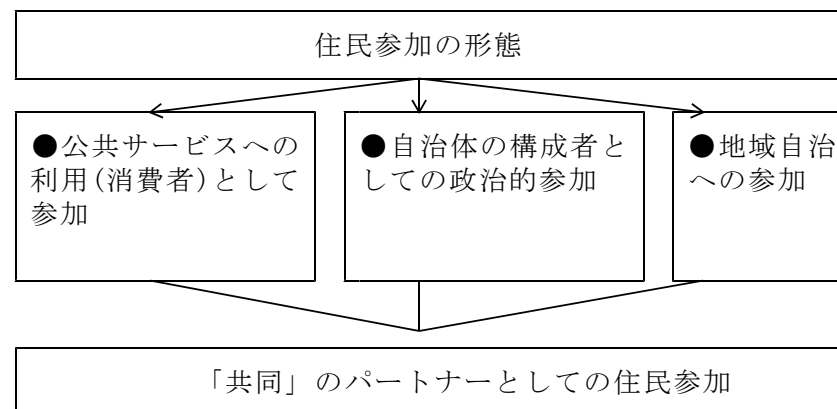
- 高齢化、過疎化、混住化という「3K」の進行に伴う、農村コミュニティの再構築
- 住民意識の多様化に伴う、村づくりにおける新たな合意形成の仕組みづくりへの模索
- 住民生活様式やライフスタイルの変化に伴う、新たな施策課題（例えばアメニティ、環境など）への対応
- 従来の生活環境基盤整備（量的水準）から、「うるおい、やすらぎの高まり」と言う、「快適環境形成型整備（質的水準）」へ、と言う新たな方向づけ
- 従来の行政主導型取組みからの脱却、パートナーシップ型への転換（行政、住民、企業共同による取組み、役割分担）

(2) 住民参加の階層

（アメリカの社会学者シェリー・アーンスタイン）

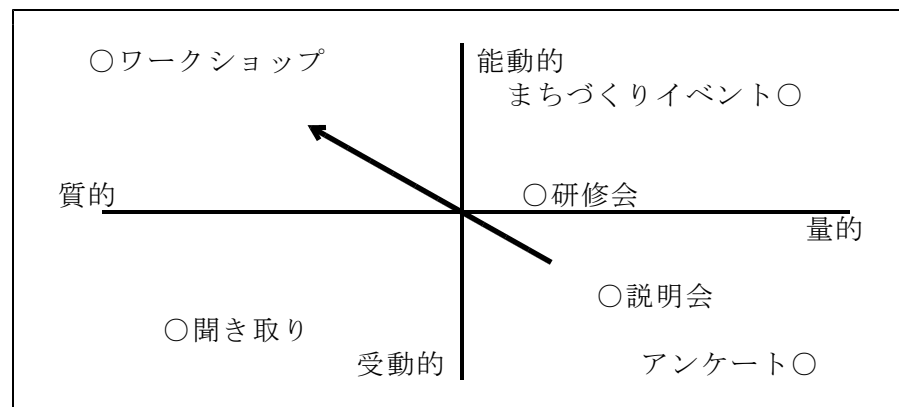
- | | | |
|--------------|---|----------------|
| ⑧住民によるコントロール | } | 住民の力が生かされる住民参加 |
| ⑦委任されたパワー | | |
| ⑥パートナーシップ | | |
| ⑤懐柔 | } | 印としての住民参加 |
| ④意見聴取 | | |
| ③お知らせ | | |
| ②セラピー（癒し） | } | 住民参加と言わない |
| ①あやつり | | |

(3) 住民参加の形態



2. 住民参加の手法と可能性形態

(1) 住民参加の手法

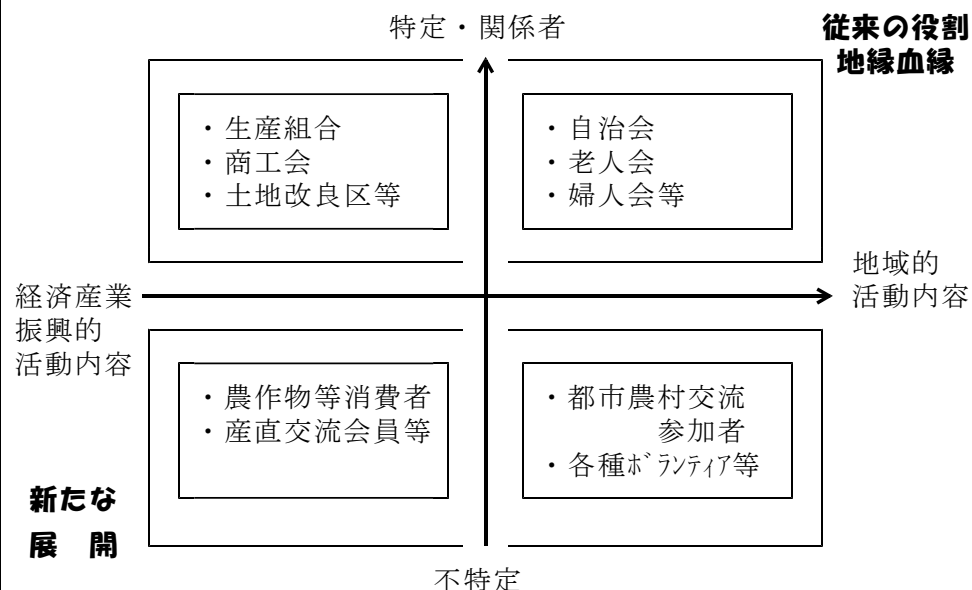


(2) 住民参加の可能性（期待する効果）

	啓蒙普及	情報公開	意向把握	合意形成	実践活動
・マスコミ等通信情報	◎	◎		○	
・説明会参加	◎	○	○	○	○
・広報誌配布	◎	◎			
・アンケート調査			◎	○	
・研究会参加	○	○	○	◎	○
・社会実験	◎	○	◎	◎	○
・イベント	◎	◎		○	○
・アドバイザー	◎		○	◎	○
・ワークショップ	○		◎	◎	◎

注) ◎: 比較的大きな効果が期待できる手法 ○効果が期待できる手法

(3) 「横断的パートナーシップ型組織」への展開



* ワークショップとは

「ワークショップ」とは、英語で「工房」とか「仕事場」という意味だが、むらづくりにおいては、地域の人達が一緒に地域を点検したり、話し合いをして共同でむらづくりやまちづくりのための提案などをまとめる作業を行う集まりを意味している。

(4) あれこれ

○住民アンケート

住民の声を計画に反映するに当たり、極めて初歩的な手法である。それなりの効果は期待できるが、活用の仕方に注意が必要。一般的には、一家庭一票のアンケート票が配布されるが、回答されるのは世帯主が圧倒的に多い。結果として、世帯主の要望を中心に上げることとなる。しかし、地区・集落は、彼らだけで構成されている訳ではない。彼らの親や子供、さらには孫も構成員の一人である。そうした世帯主以外の声も汲み上げるような手だても考えなければならない。

○環境点検地図～構想図

集落計画の第一歩として有効。日常的に見慣れた環境を改めて点検してみると思いがけない発見・感想がある。こうした事を地図の上に書き込みをすることによってその集落の持っている問題点、資源などを把握する。参加者は調査段階から計画に主体的に関わっていくことが可能となる。そうした情報を踏まえて、今後の地区・集落のあるべき姿を構想（ビジョン）として検討していく手法。

○ネイチャーゲーム

視・聴・臭・味・触と五感で楽しめる。ゲームを通じて、自然への理解と体験と豊かな感性を得るための環境プログラム。アメリカのナチュラリスト、J・コーネル氏によって考案された。参加者や場所、目的にあわせて効果的にゲームを組み立てる事ができる。特に、感性豊かな青少年の声を汲み上げるには有効な手法である。そうした結果を大人が知ることで、また新たなアイデアが沸き上がる。

○役割体験旅行

色々な属性に身を置き換えて種々の出来事を体験し、その置かれた場の状況を知る。例えば／・猫になって人間の暮らしをしてみる／・体長1メートルの子供の目の高さで子供の動きで体験してみる／・歩く事が大変になったお年寄りの立場で道を歩く／・車椅子を使ってみる／・ヨチヨチ歩きの幼児になって川をのぞいてみる／・旅行者や開発業者になってみる、等。

○OKJ法

数人のグループで討論を進めテーマの全体像を把握するのに有効。テーマについて自由に討議した後、各自10枚ほどのカードに思いつくまま意見を書き込む。そのカードの内容を分類しそれぞれに分かりやすい表現でタイトルをつけ、さらにそれを模造紙に内容の関連を考えながら配置を決めカードを張り付ける。テーマに関わる様々な要素の相関関係が一目で見わたせる。

○模擬討論(ディベート)

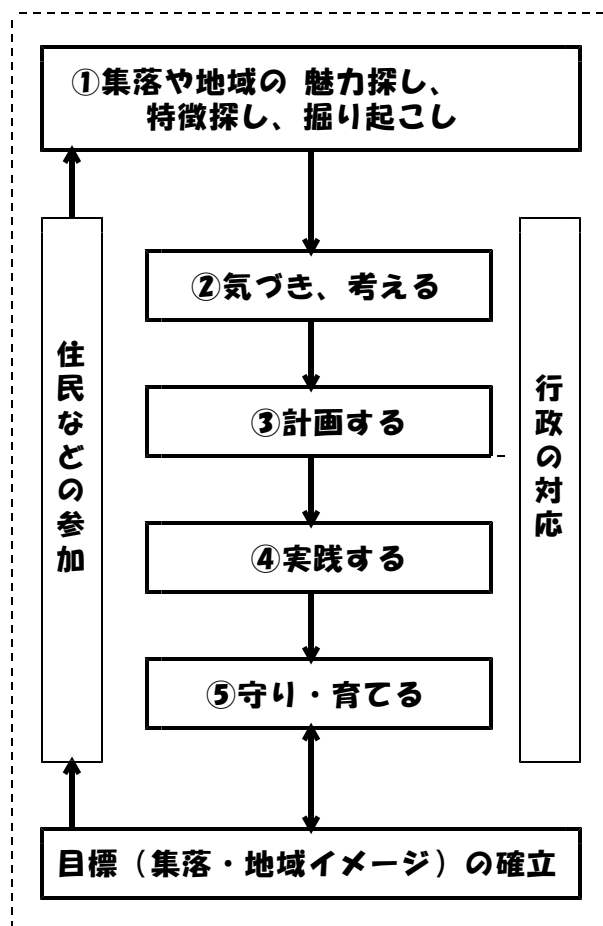
保存か開発か、集会所はどんな部屋を作るかバイパス道路をどこにもっていくか、学校は存続か統合か、日常いろいろな問題について議論がされているが、個人の感情に左右されることもまま見受けらる。ここでは客観的に問題を整理していくため個人の意見とは別に賛成派、反対派と審判に別れて討論を進める。つまり個人的には賛成の意見をもっているでも討論では反対派として論陣を張ることもある。参加者はどちらの意見が良いか判定をすることもある。

○演劇(ロールプレイング)

住民自らが演じる劇。ストーリーの展開を考えるが、できるだけ身近な題材を選ぶ。まず演じる役割(住民、役所職員、地元議員、市長)をなどを決め、その立場にたって発言を考える。普通の時にはいいにくいこともユーモアに包みつつ辛辣なせりふとして登場させることで、多くの人に問題を提起していくことができる。

3. ワークショップの進め方

●進め方



●参加内容と行政支援内容

	参加内容	行政支援内容
①	●発意 ●環境（資源）点検活動	●呼びかけ ●準備・企画・運営、協力
②	●意見・意識の把握 ●問題点の抽出 ●課題の確認 ●課題の公開と共有化（図面化）	●既定計画等行政情報の提供 ●日常活動の環境改善 ●意識調査やワークショップの実施 ●共同研究・作業の実施
③	●目標の設定 ●構想イメージの立案 ●提案	●先進事例の研修 ●専門的知識・ノウハウの提供 ●既定計画等計画情報の提供 ●共同作業 ●事業評価制度の導入 ●パブリック・コメントの定着など
④	●役割分担の検討 ●共同事業化の検討 ●事業決定の選択と決定 ●計画管理	●既定計画等情報の提供 ●専門的知識・ノウハウの提供 ●助成・支援
⑤	●管理運営体制づくり ●協力支援体制の強化 ●外部ネットワーク活用 ●事業管理	●組織活動への支援 ●管理運営事業への支援

4. ワークショップの特徴

(1) フラス面

- ・住民（参加者）が個人またはグループ単位でいろいろな意見やアイデアを出し合い、意志決定を行える。
- ・住民（例えば、子供と高齢者等）相互の新たなコミュニケーションの場となり、コミュニティの活性化につながる。
- ・誰もが自由に意見を出しやすいように工夫されているため、特定の参加者に偏らない。
- ・グループの創造行為と合意形成に焦点が当てられているため、参加者の達成感、満足感が大きい。
- ・形式にとらわれず、遊びの要素も加味されているため、子供の参加や専門的知識が少なくとも参加が容易である。
- ・ワークショップ後の具体的取組みや運営面での住民意識レベルの向上や行政と地域との価値観の共有が期待できる。
- ・テーマ（内容）は、例えば施設の計画づくりから、地域のビジョンまで幅広く運用可能である。

(2) 限界面（課題）

- ・原理的には参加者数は無限であるが、実際の運営上は50人から60人程度が適正であり、参加者が地域の一部に限定される。
- ・ワークショップは「討論会」ではなく、共有可能な選択肢を見つけ、合意形成を踏ることが目的であるため、進行役（ファシリテーター）の役割が重要である。
- ・参加者が限定されるため、ワークショップの成果について地域等への情報公開を積極的に進める。
- ・参加者の意欲・期待・属性等は通常多様であるため、成果は「やや思いつき・平均的性格」となる場合が多い。
- ・ワークショップの単発的な開催では、提案内容を深める余裕は少ないそのため、複数回開催することが望ましい。
- ・行政が前面に立つと、「行政懇談会・事業推進会議」となりやすい。
- ・ワークショップ開催後、行政と地域でのフォローアップが大切である。

5. その運営と役割分担

(1) 推進（運営）の原則

- 1. お互いの発想を認めあう・・・そういう考え方もあるんだ！
2. 交信機会を多くする・・・大勢と話したら楽しかった
3. 潜在的な創造力を解放する・・・大風呂敷と言われても良い
4. おちこぼれさせない・・・参加者全員が主役
5. 相乗的創造・・・雪だるまのような発想を歓迎
6. 集団創造の力を認識

再び1に戻る。しかし振り出しではなく創造の階段は7段目

(3) 担当者の役割

従 来

- 事業関係者の意向のとりまとめ
- 関係機関との連絡調整など

これから

意識として
柔軟性／全体性
開放性／共感性
行動性／実行性等

- 地域への積極的な情報提供と意識啓発
- むらづくり人材の発掘と育成
- むらづくりへの広範な参加体制の構築支援
- 専門的技術や知識ノウハウの習得と普及
- 情報ネットワークの構築

●これからの担当者等に求められる人間像

- ・ **ファシリテーター**：利害関係者のみならず、住民や外部の理解者などを含め、一人ひとりが持つ知識やノウハウ、経験やアイデア、やる気を引き出し、住民参加を押し進める人材
- ・ **コーディネーター**：地域社会の中で、価値観や立場の異なる人についてお互いの特性や考えを交える機会を作り話し合い、理解を深めながらそれらの成果について共通の価値観にまで高め、創造する人材